

# 遺体安置所 見守る市職員

## 遺族の顔は安らいだ

# ねえと会った

岩手・陸前高田

「会えてよかった」  
静まりかえった体育館。遺族が、物言わぬ愛するひとに、そう語りかける。悲しみよりも、安堵感があふれる。

岩手県陸前高田市の市民環境課職員、佐藤彰さん(36)は、遺体安置所の担当者として、震災直後から不思議な光景を見守り続けている。

学校の体育館の床に緑色の薄いシートが敷かれ、袋にくるまれた遺体が整然と並ぶ。遺体が多すぎて、ひとつぎの中に入れることのできた安置所は、最近まで市内とその周辺5カ所のうち1カ所だけだった。

遺体は顔が腫れ上がるなどとして、確認にくいものが半数ほどだ。遺族らはその前でじっと目を凝らし、しばらくその場に踏みとどまらな。みんな必死に捜しているんです」

捜し求めた人を運良く見つけても、抱きしめること

はもちろん、触れることすらできない。感染症の恐れがあるとして警察から止められているのだ。顔を近づけて、こみ上げた感情を吐露することしかできない。

きれいな状態で発見され、身分を証明できる持ち物があるのに、いつまでも引き取られない遺体もある。「きつと家族全員、親族みんなが津波に流されたのだらう」と想像する。

あちこちの安置所を訪ね歩く人が多い。運び込まれる遺体の数は減ってきているが、足を運ぶ人たちの姿は絶えない。

安置所から市の防災対策本部がある給食センターに帰る道すがら、がれきの山を目の当たりにする。そこ

では、遺体の捜索活動が続いている。「先のごとは、まだ考えられない」。ふりかかる現実が夢のようで、今も夜は一人で眠れない。

同市税務課の熊谷直樹さん(27)は23日まで、遺体安置所で遺族の先導や受け付けなどをしてきた。

震災直後、両親の安否すら分からぬまま遺族の対応に追われた。市庁舎は全壊し、職員約300人のうち約70人が死亡、行方不明だ。安置所には職場の先輩や同僚も運び込まれてくる。

わざと難しい方言で話しかけてきて「おまえら若手はこんな言葉知らんだらう」と、冗談めかして笑っていた先輩がいた。周りを

盛り上げ、明るくさせてくれる。そんな人だった。安置所が開く前の午前8時に足を運び、同僚や知り合いがいなかったことを確認して、その先輩を見つけた。役所の作業用ズボンにワイシャツ、ジャンパーを着こんだ見慣れた格好。苦しそうな表情に、涙も出なかった。

そんな日は、気持ちも落ち込む。救ってくれたのが、担当職員同士の夜のミーティングだった。それだけの体験を語り合うと、自然と気持ちが楽になった。

「市全体がゼロからのスタート。でも気持ちだけは前に向いている。復興が私の一生の仕事です」

震災から3週間近くたつたいまも、同市には引き取り手のない遺体が約300体、行方不明者が約1300人いる。